

# 世界基軸教育の提案 脳のゲームから“心のゲーム”へ

田中佳奈江      川原田朋美

# 目次

1 序論	1
2 教師に育てられた子ども 川原田朋美	2
2-1 教師の子としての地獄	
2-2 教師の地獄	
2-3 教育・学問の限界	
3 教師として生きて 田中佳奈江	6
3-1 暗記教育の限界	
3-2 環境を変えることができない	
3-3 教師の葛藤	
4 世界基軸教育の可能性	8
4-1 人間＝受動的な存在	
4-2 人間＝選択不可能な存在	
4-3 人間＝不可能性そのもの	
4-4 現象の根本	
4-5 151デジタル言語	
5 私たちの物語	11
6 参考文献	

## 1.序論

これまでの歴史文明は、人間主導であった。人間は、動植物を支配、統制してきた。しかしながら、人間は今、人間の知能をはるかに超える存在であるAIに出会い、新たな人間の進化、新たな歴史を開闢していくタイミングに直面している。

現代は、ChatGPTを筆頭に開発が進められている生成AIなど想像を超えるテクノロジーが進化してきた。AIの進化スピードは、1年後には2倍、2年後には4(2\*2)倍、3年後には8(2\*3)倍、10年後には1000倍、20年後には1000万倍、そして30年後には10億倍に達するため、2045年には人類全体の知性を人工知能が超えると予想されている。

さらに、コロナパンデミック、地球温暖化、ロシアのウクライナ侵攻による核兵器使用の危機、世界規模の物価上昇、米の大手銀行の破綻など、これまでにない危機が生じている。そのような現代は、Volatility(変動性)Uncertainty(不確実性)Complexity(複雑性)Ambiguity(曖昧性)というVUCA時代と定義されている。今までの教育は、VUCA時代に機能できるのか。未だに鬱や自殺、殺人、戦争、不登校が増加するなど課題・問題が山積みな現象は、これまでの教育の限界を物語っている。

このまま人間は、あらゆる時代的危機に打撃を受け、AIに淘汰され、受動的な無用者階級となり人類滅亡に陥るのか。反対に、危機をチャンスに団結し、AIが憧れる人間、尊厳人間の連携(宙船)に挑戦し、自らの物語、自らの歴史を創り、世界人類救済の道を主導していくのか。

その鍵となるのは、脳から「心」への基準点革命であり、それを可能とする教育が「世界基軸教育」である。それは、まるで天動説から地動説が当然になったように基準点が変わり、みえる世界が瞬時に変わる。脳でみたら分離、摩擦、衝突が、心でみたら共通、愛、創造、共創へと認識が変わるのである。

世界基軸教育は、1996年21世紀の悟り人令和哲学者ノジェス著によって開発された。今までの人間の限界を明確に定義し、人間最高の機能をアップグレードさせ、AIが憧れる人間の尊厳、価値、連携が可能となる教育である。脳がリードする暗記教育で無用者階級を量産する教育は終焉を迎え、心がリードする世界基軸教育で心の時代が始まる。

本論文は、世界基軸教育を愛する川原田朋美と田中佳奈江の共著である。151言語を土台に、敬意をもって既存の教育の限界を定義し、世界基軸教育の提案に挑戦する。教師に育てられた体験や経験、親や教師からの視点や経験を土台に論じていく。これまで封印してきた過去を取り扱い、等身大で教育に向き合っていく覚悟である。本論文をきっかけに、世界基軸教育への興味や関心が広がり、教育VISION同盟を結べるような運命的な出会いを渴望し、愛と情熱を込めて論文に記す。

## 2. 教師に育てられた子ども

### ①教師の子としての地獄

私(川原田)は両親ともに教員で父が中学校、母が小学校の教員だった。姉弟がいて、次女として育った。教師と言えばどんなどんなイメージを持つだろうか。私にとって教師とは一言でいうと人格者のイメージであり、私の理想は差別がない平等な関係づくりや生き方をしている人になることだった。

父は労働組合に所属し育児休暇取得のための運動や職員の労働環境改善に尽力していた。同和問題にも積極的に取り組み、男女平等や差別のない社会を創るため、教員の枠を超え精力的に活動していた。母もまたしかり。両親は人権意識がとても高かった。そのせいか、私は幼少の頃より「女の子らしくしなさい。」「女の子は赤色、男の子は青色。」などのジェンダーに関わる言葉かけを一度もかけられたことがない。知識も意識も高い両親のおかげで、そのような勝手な決めつけもされずのびのびと育つことができたのではないかと思う。

当時両親がフルタイムで働いていた家庭は私が育った地域では珍しく、教員という激務をこなしていた両親と、他の家庭で母親がパートタイムで働いていた家庭を比べると、手をかけられていなかったのではないかと思う。しかし、人権意識の高い両親であったこと、また経済的側面では苦労した覚えもなく、進学に関しては金銭的な心配をしたことがないことについては、大変恵まれた環境だったのではないかと思う。付け加えて私は両親から体罰を受けたことや罵声を浴びせられたことは一度もない。主観的に見てもかなり恵まれた環境であったのではないかと思うことを、あえてここで記述しておきたい。

しかし関係性を振り返ると、人権意識が高いからこそ、また教師という人を指導する側の立場、教育という人間が形成される土台を導く側という重大な職務に従事していたからこそ、その逆の姿勢態度があったとき、より一層マイナス面にフォーカスがあたってしまったのではないかと思う。例えば、全体的に汚れた洋服の中の一点のシミはさほど気にならないが、新品の服に一点のシミがあったとき、それがどんなに小さなシミであっても大変目立ってしまうように、教師というイメージ、仕事が休みの日であっても公務、特に教育に従事する人間としての言葉行動には重大な責任が付いてまわる。言葉と行動が一致してない、そんな人間として当たり前のことすら教師には許されないという偏見が全くないとは言い切れないのではないだろうか。

この偏見は子供である私が両親を観た時にも発動していたのではないかと思う。両親は同じ教員で、正規職員として共働きであったにもかかわらず、家事育児全般は母が担っていた。私は子供ながらにこのことに強烈な違和感を感じていた。母も言葉では差別はよくないことだ、平等を大事にというが、長男である弟への対応と、次女である私への対応にやはり違いがあった。例えば、洗濯物を取り込むことを私にはお願いするが弟にはしないなど、些細なことではあったが、言っていること(知っていること)とやっていることの違いは明確であった。責めるつもりは全くないが、無意識的な「女の仕事」「男の仕事」という偏見からくるものではないだろうか。

振り返ると、そのような些細な違和感の積み重ねが、人間や人間関係性に対する不信と諦めを蓄積する結果になったのではないかと思う。高い理想を掲げ意識すればするほど、自他の内に理想と正反対の言動をみた時のショックは大きかった。当時はそのような無意識のショックを言語化することができず、父と母を反面教師に私は理想の人格者になるために教員にもなった。

## ②教師の地獄

しかし実際教員になってみると、右も左もわからず、子供たちとどう接したらいいかも分からない。毎日が多忙すぎて次から次に起きる問題に「今日は何も問題が起こりませんように。」と心の中で祈りながらいつもびくびくと勤務し、どんなに頑張っても矢継ぎ早に起きる問題に身も心も疲弊していった。自分の想いは全く伝わらず、保護者からは誤解され、ストレスで子供たちのことを可愛いとさえ思えない状態にまでなっていた。それどころか、教室では「人に優しく」と指導している自分が子供たちに優しくできない、他のクラスの教師にジェラシーして足を引っ張りたくなる想いにかられる。相手の欠点を探し、自分が優位になるような論理を頭の中で必死に組み立てることで、なんとか自分を鼓舞することしかできなかった。子供たちを前に理想とする自分と実際に考え感情している自分のギャップを観た時、とてつもない絶望感、諦め、虚無感に打ちのめされた。どんなに頑張ったって、こんな醜い考え感情を持った私には人格者になることは無理なんだという、自分に対する不信感がどんどん膨らんでいき、自己肯定感を育む側である自分自身の自己肯定感が、教員として過ごせば過ごすほどに低くなっていった。

## ③教育・学問の限界

教員が教科指導以外でやるべきこととして「集団生活を通じて他人への思いやりの心を育てること」が最も高いという調査結果から（「教員意識調査」「保護者意識調査」報告書）教員として指導したい内容と教員自身のあるべき姿との間を埋めようと、何度も努力し続けなければならないことがわかる。しかし、そのための明確な手段道具がないこと、また個人による経験体験に依存するしかないことが、やればやるほど自己肯定感が低くなってしまう原因の一つではないだろうか。

しかし、よく考えると明確な手段道具は実は教育であり、学問であるべきではないだろうか。教職課程や現代の教育・学問の中に、語れば語るほど、学べば学ぶほど自分自身や他者が好きで好きでたまらなくなってしまうような要素があるだろうか。実際はその反対で、語れば語るほど学べば学ぶほど自信は無くなり相対比較で忙しくなったすえ自己肯定感が低くなり、理想と現実のギャップはどんどん広がるばかりで、意欲の低下や諦めを蓄積していく現象が起きてはいないだろうか。

2021年度にはうつ病など精神疾患を理由に休職した公立小中高・特別支援学校の教職員は20年度より694人多い5897人で、過去最多であった。人間を形成する根幹的な役割を担っている教育現場において、なぜ人が精神疾患になってしまうのだろうか。管理的なシステムの問題点や時代の変化スピードなどが指摘されてきたが、本当の原因は教育・学問にあるのではないかと考える。

各教科が人間形成にどれくらいの影響力を持っているだろう。本来ならば指導する側は、語れば語るほど指導すれば指導するほど、好奇心やエネルギーに溢れチームプレーが楽しくてたまらなくなり、個人のクリエイティブ性も発揮されていく、そんな人間形成をしていく基盤となるのが教育であり学問のはず。しかし指導する側は自信がなくなり自分のやってい

ることに意味や価値を見出せなくなってきたてはいないだろうか。このことは教育・学問を享受する側にも同じことが言えるのではないだろうか。

両親がまじめで平和活動、人権活動に積極的な教師であったことや、自分自身も教師になって感じることは、理想と現実をイコールにする明確な手段方法・道具として教育・学問が機能していない、それどころか逆に理想と現実の格差を助長する道具として結果的に機能してしまっているのではないかという疑問である。教育の目的は教育基本法の改正により、「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」と規定され、学問においては、「第1は、生活上の便宜と利得の増大である。第2は、自分を作り上げていくこと、確立していくこと、いわゆるBildungとしての教養であり、このような教養による人間形成を通じての社会の形成である。前者も後者も重要であるが、後者の効用を忘れてはならない。」と2つの効用が明記されている。これまで個人の性質や経験体験、周りの他者を含めた環境、社会の仕組みなどに現象の原因があるという前提で論理展開し、そこに変化を与える役割として教育・学問を手段道具に据えていた。しかし人間の知能の10億倍を超えるAIが登場しようとするこのVUCA時代に、大前提が存在を現象の原因の根拠とする教育・学問のままで果たして良いのだろうか。これまでの教育・学問によって人間は進化発展してきたという功績に感謝し敬意を払うと同時に、さらにバージョンアップすべきところを補う観点で、新しい教育・学問を提言したい。これまで人は教育・学問によって何を変化させてきたのか。そしてこれからの時代に変化させるべき対象とは何なのか。そのために必要な教育・学問とは何なのかについて述べていきたいと思う。

### 3. 教師として生きて

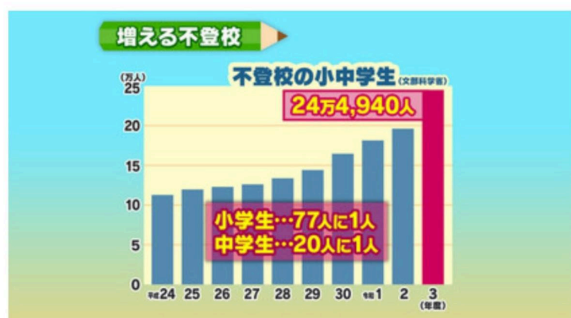
#### ①暗記教育の限界

私(田中)は、公立学校(盲学校・特別支援学校・中学校)で教員を約12年ほど経験した。敬意をもって、今までの教育教育の課題を論じ、新たな道を開拓していきたい。

これまでの教育について、一言で定義すれば「知識を詰め込む暗記教育」である。経験や知識を詰め込み、その量や正確さ、スピードによって評価する。戦後の大量生産大量消費時代の教育が、日本ではまだ実施されている。経験や知識、情報をもとに、自分や他者などをジャッジし、自分や人に対して厳しくなる。常に相対比較をし、自己否定、他者否定が激しくなる。暗記教育でインプットされた経験や知識を完全にゼロ化することができず、自ら作った考えに束縛され苦しむ人間を量産する。

人間の知能をはるかに超えたAIが登場した今、暗記教育はAI時代に相応しい人間育成に貢献できているのだろうか。現在、不登校は増えている。その理由は、いじめではなく“無気力”が高い。

小中学生の不登校  
【過去最多！不登校の子どもは全国約24万5000人】



る。AI時代の今、繭の中に留まり、受動的で暗記の機械的な条件反射しかできない人間は、簡単に無用者階級に陥る。教育によって人間はつくられる。1分でも1秒でも早く、教育が変えていく必要性を痛感している。



パナプティコン: 中央に建てられた監視塔からすべての囚人を監視することができる。(写真) Wikimedia Commonsより

### ③教師の葛藤

教員時代、授業は必ず50分で終え、5分休憩に次の授業準備、必要であれば担任するクラスの指導、保護者対応など、常に時間に追われていた。廊下を走り回る日々であった。

また、授業や学級運営については、保護者からの監視、要望の目は鋭い。学校内でも、子どもたちの心や教員のねらいよりも、保護者の要望が重んじられた。子どもたちの評価以上に、保護者の評価の高さ=組織の評価のように感じられた。休憩時間が、保護者からの対応で終ることも、しばしばだった。教員という仕事は、サービス業のような会社員に感じられることばかりだった。

子どもの可能性を活かしたくて教師になった。それにも関わらず、いつの間にか保護者や管理職からの評価を恐れ、授業や学級運営では彼らの要望を生かすようになっていた。教師という仕事は何なのか、疑問と葛藤があっても胸に秘め、目の前の業務をこなす日々であった。現在、教員の離職率、精神疾患も高まっているが、当然のことではないか。また、近年は、教師不足がクローズアップされるようになった。長時間労働など学校のブラック化が叫ばれる中で、教師が憧れ職業とほど遠く見えるのであろう。

## 4. 世界基軸教育の可能性

### ①人間＝受動的な存在

人間は母を選んでいない、父を選んでいない、生み落とされた地域を選んでいない、社会を選んでいない、国を選んでいない、文化を選んでいない、時代を選んでいない、文明を選んでいない。何一つを選んでいないのに、ここにいる。何一つ意志決定していないのに、ここにいる。なぜ生まれてきたのかもわからず、この体、この声、この性格、この思考、感情、知能指数で存在している。何一つを選んでいないのに、存在しているこの宇宙空間で、何を目的に生きればいいのか。もとより意志決定したことは1ミリもないスタートで、何をゴールにこの宇宙を生きればよいのだろうか。

ゴールを目指す前に、スタートを変えたいと思うのが当然ではないだろうか。1ミリも意志がない、この宇宙空間で何をどのようにしたい？なんて問いは馬鹿げてる。そもそも私はこの時間空間存在を選んで存在していない。

この時間空間内がRPGゲームの中なら、あなたならどうする？まずはアバターを選ぶのではないだろうか。自分の思い通りのアバターを創ることができる。髪型、顔の形、表情、体系、特性など、自由自在のはずだ。それなのに、この現実空間にいる自分だと思ってきたものには、自分だと自己を認識した時から自らの意志は1ミリもないことを無意識に瞬時に悟るのではないだろうか。それは、とんでもなく不自由なことではないかと思う。『妥協から始まる人生』なんて笑えない。しかし、これがこの現実空間の事実である。

この母親、父親、体、特性、思考、感情、人間関係、何一つ選んでない。大人になれば自由に使えるお金も増えるし、自由も少しずつ手に入る、整形手術もできるし、若返ることだってお金で何とかできる。と思うかもしれないが、思考、感情、エネルギーも変わらないから、必ず同じパターンにドハマリして同じことを繰り返したりする。人間関係においてもそうである。死んで生まれ変わっても模様形は人間の目には見えなくなっても原子としてこの地球上に残り、また同じカルマを繰り返す。

それだけ意志が1ミリもない、自分だと無意識にいつの間にかそうだと思い込んでいるこの体の自分は「受動的」な存在である。前述したように存在する事すら意思決定していない。存在したい！と思って、存在している人間がどれくらいいるだろう。ほとんどの人がいつの間にか、「いた」状態ではないだろうか。自分のことなのに、自分がどこから来て、どこに向かっているのか分からず「いる」状態である。実はこのことは人類共通である。貧乏だろうと、お金持ちだろうと、王様だろうと奴隷だろうと実は同じ、誰一人自分が産まれた環境を自ら選んではない。

## ②人間＝選択不可能な存在

存在すら意思決定できない「自分」は、選択することも不可能である。週末はおひとりさまの時間を大切に、好きなラーメン屋めぐりが趣味という場合も。ラーメン屋に行く道をあなたは作っていない。一直線に行けないという不自由さを常に内包している。右に曲がったり、時には遠回りしたり、好きなように好きな道で行けない。妥協して仕方なく、その道しかないから、その道を行くだけ。ラーメンが出てくるタイミングも自分とは関係なく出てくる。箸一本自分が好きな柄、好き使い心地の箸でもない、お店が自分とは関係なく勝手に用意したものを使うしかない。お皿もそう。ラーメン自体も作ってない。ラーメンという概念も誰かが作った物。自分で選んでるのではなく、実は選ばされているだけ。味覚もそう。あなたが生まれた時代、国、地域、血縁家族が脈々と受け継いできた結果、その味覚になってしまった。あなたが選んだ味覚ではない。そうやってみていくと、自分が選んだものは何一つないことがわかる。選択不可能な存在なのである。

## ③人間＝不可能性そのもの

生産性という側面から観てみても同じである。呼吸するための酸素一滴も作れない。光一粒作れない。自分の身体すら酸素や重力、地球の自転公転に依存しなければ形成できないし、維持できない。そんな依存した存在である自分が一体何を生産できるのだろうか、クリエイティブ性を発揮できるのであろうか。不可能性そのものが、実は自分だと認識してきた自分の正体である。

ドイツの社会心理学、精神分析、哲学の研究者であるエーリッヒ・フロムは、人は愛されることには関心を持っているが、愛することに関心を持っていないと言っている。（「愛する

ということ」エーリッヒ・フロム)その原因はどこにあるのだろうか。意識しているしていない関わらず人類のスタートそのものが受動的な存在として自己を認識しているから、そこから出るエネルギー(方向性)・感情・思考・言葉・行動・人間関係全てが受動的態度になってしまうことに原因があると考ええる。

このことは、個人の問題ではなく、全人類の問題である。変化しようといくら頑張っても自ら変化を創り出せない、変化を起こせたのなら偶然たまたま変化を起こせたのであり、主体的に意図して起こせた変化ではない。物理学における因果性と偶然性が部分的になっている原因でもある。自分や他者、環境など存在に原因を見出そうとしてしまい、自分との争いも他者との争いも止められなかったのは、自分だと思っているこの存在が究極の受動的な存在であり、“真の自分が何なのか”を知らなかったからである。

性別・歴史・文化・宗教・国・社会そのどれが違っていても全人類共通に自分自身をどう思うのか、これまでの自己規定と、真の自分とは何なのかに導くことのできる教育・学問が必要である。でなければ、人間の知能を超える存在が登場するVUCA時代に、不信不安恐怖が蔓延し人間の尊厳が破壊され続け、生きる意欲の低下も止まらず、新しいイノベーションも起きず、人類滅亡の危機は免れないだろう。

#### ④現象の根本

幼少の頃から、理想と現実のギャップのはざまで、経験体験を重ねれば重ねるほど、学問を学べば学ぶほど、自己不信、他者不信、環境不信が深まった。教育・学問を司る教育現場において不信はさらに深まった。生まれたばかりの赤ちゃんには無限大の可能性があるので、成長するほどに可能性が狭まっていくことも同じ現象ではないだろうか。その本当の原因とは、経験体験が足りなかったわけでもなく、環境が貧しかったわけでもなく、経験体験を重ねるたびに厚着していく偏見の蓄積である。“観点”という。年齢、職業、住所、国、宗教、経験体験などより「自分自身をどう思うのか」という規定、アイデンティティを形成する。それは0才から10才までの母親または母親の立場にある人との関係性によって決定される。人は一人一人その観点の服を着て自分だけの独自の判断基準を拠り所にして、意思決定し、選択して生きている。

しかし前述したように、この世界に意思決定や選択は1ミリもないため観点の服を着て独自の判断基準で意思決定して選択しているように錯覚している状態だと言える。人類は錯覚の中で意思決定し選択し、時には争い戦争をはじめ核爆弾まで落としてしまう。その判断・選択が正しいと思い込んで。また、観点には①肯定／否定②完全／不完全③異質／同質の問題をはらんでる。

人類共通の最大の錯覚はなんだろうか。それはこの体が自分だと思い込んでいること。この体の自分が何にも依存せず独自で存在していると思い込んでいることである。自分で歩いて自分で考えて自分で歩いている、その自分は独立して一秒も存在できない。その存在が自分だと思い込んでいる自分で幸せ成功するために頑張ろうとしているのが人間の現在地である。

カントは「純粋理性批判」の中で、「人間は何を知るべきか」と言っている。カントは時空間の中にあるものを有る、無いものを無い、と規定した。時空間にあることだけを理解する世界は自然科学であり、これまでの学問の基盤であった。量子力学が登場した今、この宇宙は波動と粒子の性質を併せ持つ世界になった。有る、無いを内包したものがこの宇宙だとすると、この学問の基盤をバージョンアップする必要がある。

#### ⑤151デジタル言語

『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」の中に「はじめに言葉があった、言葉は神と共にあった」と述べられる。中学校の国語教科書に採用されている池田晶子著「14歳からの哲学」には、言葉の大切さについて論じられている。しかしながら、現代人は言葉を当たり前  
に活用するが、今まで一度も言語について疑ったことがない。世界基軸教育の提唱者ノ  
ジェスは、「現在、世界中で使われている言語は、7万年前に原始人が動物との競争に勝つ  
ために発見し発明したアナログ言語。S(主語)V(述語)によって、沢山の動きの偽物主体を  
生み出す不完全言語は、終わりなき闘争を生み出してきた」と定義する。そして、このアナロ  
グ言語の限界を補う151デジタル言語を開発し、教育体系化し、誰もが理解し、応用活用で  
きるようにした。AI時代、これまでのマニュアルや伝統は通用しない。今までの基準軸はす  
べて破壊される。どんな状況にも変わらない不動の絶対基準軸を持つためには「言語」の限  
界を超える必要がある。

今までのアナログ言語は、分離や摩擦衝突を繰り返してきたが、デジタル言語を通して異  
次元と疎通交流し、全てと繋がることができる。人間関係と物理学、愛と数学など、暗記教育  
ではバラバラに見えた学問が自分と繋がり、知的好奇心が向上し勉強が楽しくなる。また、  
デジタル言語は、誰もが生産者になれる言語である。人間を無用者階級にするのではなく、  
まるで子宮のように違いを溶かし融合し、子どもが誕生するように次々とイノベーションを起  
こしていく。

## 5 私たちの物語

私たちは世界基軸教育を愛し、教師の子ども、教師として生きてきた背景をも活かし、世  
界基軸教育を全世界80億にプレゼントしたいと懇切に渴望している。目で見ただけのアナログ認  
識では、環境を変えることができない。デジタル認識であれば、環境を改造し未来を創るこ  
とができる。その偉大な道具として、151デジタル言語が、日本で誕生している。

1945年8月15日。アナログ認識では、戦争に負けた日である。デジタル認識では、戦争  
を終わらせた日である。広島・長崎、そして各地に空襲を受けた日本は、アメリカなどの国  
を恨まず、戦争を終わらせた国として誠意を尽くしたために、未だ核爆弾は使用されていな  
い。デジタル認識であれば、歴史のリテラシーをも変えることができる。

岸田首相は、国連総会で「教育チャンピオン日本」「人間の尊厳」を宣言した。日本のリー  
ダーの宣言は、世界基軸教育の裏付けにより実現可能となる。教育の成果は、20年を要  
すると言われる。アナログ認識であれば長期戦であるが、デジタル認識は今ここ全部が変  
わる。世界基軸教育を義務教育にすることで、人間の尊厳を取り戻し、本来の人間機能が  
爆発し、純度100%心から真の人間ではじめられる。人間最高！人間が大好きな心で繋  
がった宇宙の乗組員で溢れた未来が実現する。だから、私たちの物語は、世界基軸教育  
を義務教育にし、未来を変える物語を奏でていきたい。

## 6 引用・参考文献

「教員意識調査」「保護者意識調査」報告書

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyuyo/07061801/001.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyuyo/07061801/001.pdf)

令和3年度公立学校教職員の人事行政状況調査結果(概要)

[https://www.mext.go.jp/content/20230116-mxt-syoto01-000026693\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230116-mxt-syoto01-000026693_01.pdf)

エーリッヒ・フロム 2020『愛すること』

令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm)

NHK 解説委員室HP

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/476069.html>

ノジェス著「心感覚」2021

ノジェス著「Personal Univers 心半導体への進化」2022

Re・rise News インタビュー 奈良学園大学教授 松井典夫

「本当に人を輝かせる教育を共に考えたい」

[https://rerise-news.com/education/norio\\_matsui/](https://rerise-news.com/education/norio_matsui/)

奈良学園大学教授 松井典夫『カリキュラム・ポリシーの視座における「社会に開かれた教育課程」の論考』2020

池田晶子著「14歳からの哲学」2003